

京都大学の思い出

(経済研究所・坂井昭夫 2007年2月筆)

このところ、時計台裏のベンチにしばしの間、腰かけることが多くなった。昨年6月に胃の手術を受けて以来、化学療法の副作用もあって食が進まず、なかなか体力が戻ってくれない。12月某日、久しぶりにシンポジウムの基調講演者として壇上に立ったが、20分もするとふらふらして椅子に座り込んでしまった。そんな有様なので、中央食堂から研究室への帰り道にちょっと一服、時計台生協ショップで文具類を購入した後にも補食用の菓子を手にとり、論文審査がすめば自販機でコーヒーを買ってベンチに直行、といった具合だ。

百周年記念ホールができて随分たずまいが変わりはしたが、それでも法経本館を背にぼんやり座っていると、いろいろな思い出が頭の中を去来する。はや半世紀近く経つが、全学入学式で経済学部の新入生を代表して誓詞の署名に臨んだとき、手渡された毛筆を握りそこない、掌が墨で真っ黒に汚れてしまった。大学院入学式では、その轍を踏まないように意識して無事に役目をこなしたが、京大生になったとたんに失敗に学ぶ教育を授けられたという思いがしてならない。

もちろん、時計台占拠や封鎖解除など大学院時代に燃え盛った大学紛争の光景も、音まで聞こえてきそうな鮮やかさで脳裏に蘇る。ああした集团的暴力の横行を是とするわけにはいかないけれど、大学を構成する人たちの多くが世界と日本社会のあり方、そこでの大学の使命や学問の役割を、真剣に模索した時代だった。無骨ではあっても平和と国民生活の向上を願う熱っぽい純情が、ある種のガスのように京大構内の全域にみなぎっていた。

だが、今はどうだろう。謙虚さや利己主義を恥と感じる心が希薄化し、なんとも大げさな自己PRや露骨な私利追求が幅を利かせるようになったのは、日本社会全体の風潮だが、大学として例外ではない。いや、時と所を選ばず己の優秀さを喧伝し、研究成果の私物化を当然視する人たちが日のあたる場所の大半を占拠している現実からして、すでに大学が世のリード役になっている観さえある。公共財であるはずの研究成果を占有したり、特定産業・企業の利害に直結した非公共財領域の研究にのみこむのが、大学、なかでも国民の生命と暮らしへの寄与を伝統的美風としてきた京大に生きる研究者のあるべき姿なのだろうか。

経済学者たる私としては、もう一段の憂愁を禁じえない。この京大にあっても、露骨な市場原理主義を唱え、ウィナー・テイク・オール（勝者の総取り）を合理化する潮流が、マルクス学派からの転向組を含めてどんどん巨大化してきたからだ。庶民の目線を大事にして、分配の公正、社会的不平等の是正を説く論者が、誇りをもって創造的な活動が続けられる京大であってほしい。日本社会の弱肉強食化に加担するのではなく、逆にその抑制をはかるのが「大学の品格」、「経済学の品格」なのだと、祈りをこめて訴えたい。

昔日の思い出をもう一つ。結婚が早かった私には大学院時代の後半には年子の娘たちが

いたが、妻が少し病弱だった関係で、私が長女を連れて大学院に通わなければならない日も多かった。いま腰掛けているベンチのあたりを、ベビーカーに乗せた長女とよく散歩したなあ、そう言えば法経本館にある指導教官の研究室でオムツ替えをしたこともあった、小豆島の合宿にも連れて行った、と次々に古い記憶のページがめくられる。その長女も、この数年なぜか体調が優れないし、妻もまた然り。今後は私自身と家族の健康状態の改善に努め、もし目鼻がつけば、その時点で次のステップを具体的に考えることにしよう。そうした日が来ることを願っている。

(京大生協『らいふすてーじ』2007年3月号に掲載)